

みつ柏

泉鏡太郎

青空文庫

あらの
曠野

「はゝあ、此この堂だうがある所せ爲ゐで 〓 〓 陰陽界 〓 〓 などと石碑せきひにほり
つけたんだな。人ひとを驚おどかしやがつて、悪わるい洒落しやれだ。」

と野中のなかの古廟こべうに入はいつて、一ひと休やすみしながら、苦にが笑わらをして、

寂さびしさうに獨ひとりごと言ことを云いつたのは、昔むかし、四し川せん都ほう縣との御城代ごじやうだい

家老がらうの手紙てがみを持もつて、遙はる々／＼燕州えんしうの殿様とのさまへ使つかひをする、一いつ

刀ぼんさした威勢ゐせいの可いいお飛脚ひきやくで。

途次みちすがら、彼かの世よに聞きこえた鬼門關きもんくわんを過すぎようとして、不案ふあんな

内いの道みちに踏ふみ迷まよつて、漸やつと迎たどりつ着ついたのが此この古廟こべうで、べろん

と額の禿げた大王が、正面に口を赫と開けてござる、うら
 枯れ野に唯一つ、閻魔堂の心細さ。

「第一場所が悪いや、鬼門關でおいでなさる、串戯ぢや

ねえ。怪しからず霧が掛つて方角が分らねえ。石碑を力だ

右に行けば燕州の道

陰陽界

飛脚は大波に漾ふ如く、鬼門關で泳がされて、辛くも燈

明臺を認めた一基、路端の古い石碑。其さへ苔に埋れたの

を、燈心を搔立てる意氣組で、引るやうに拂落して、

南か北か方角を讀むつもりが、ぶるくと十本の指を震はし

て、威かし附けるやうな字で、曰く

ひとすく
 一 竦みに縮んで、娑婆へ逃出すばかりに夢中で此處まで駈けたのであつた。が、此處で成程と思つた。石碑の面の意を解するには、堂に閻魔のござるが、女體よりも頼母しい。

「可厭に大袈裟に顯はしたぢやねえか 〓 〓 陰陽界 〓 〓 なんのつてこれぢや遊廓の大門に 〓 〓 色慾界 〓 〓 とかゝざあなるめえ。」
 と、大分娑婆に成る。

「だが、恚う拜んだ處はよ、閻魔様の顔と云ふものは、盆の十ふろくにちこづかひげに六日に小遣錢を持つてお目に掛つた時の外は、餘り喝采とは行かねえもんだ。……どれ、急がうか。」

で、兩つ提へ煙管を突込み、

「へい、殿様へ、御免なせいまし。」と尻からげの緊つた脚

絆ん。もろに揃そろへて腰こしを屈かめて揉手もみをしなから、ふと見みると、大だい王わうの左右さいうの御傍立おわきだち。一つは朽くちたか、壊これたか、大破たいはの古廟こべうに形かたちも留とめず。右みぎに一いつ體たい、牛頭ごづ、馬頭めづの、あの、誰方どなたも御存ごぞんじの——誰たれが御存ごぞんじなものですか——牛頭ごづの鬼おにの像ざうがあつたが、砂すなほこりに埃まみに塗うれた上うへへ、顔かほを半はん分ぶん、べたりとしやぼんを流ながしたやうに、したゝかな蜘蛛くもの巢すであつた。

「坊主ぼうずは居ゐねえか、無住むぢうだな。甚ひどく荒果あれはてたもんぢやねえか。蜘蛛くもの奴やつめも、殿様とのさまの方ほうには遠慮ゑんりよしたと見みえて、御家來ごけらいの顔かほへ疋しんにかを掛かけやがつた。なあ、これ、御家來ごけらいと云いへば此方人等こちとらだ。其その又家來またけらい又家來またけらいと云いふんだけれど、お互たがひに詰つまりませんや。これぢや、なんぼお木像もくざうでも鬱陶うつたうしからう、お氣きの毒どくだ。」

と、りやうそで兩袖を擧げて、はたくと拂つて、さつほこり颯と埃を拭いて取ると、ごみ芥に咽せて、クシヤとづぬ圖拔けな嚏をした。

「ほい。」と云ふ時、もうかかくさ枯草の段を下りて居る、くしやみと嚏に飛んだみがる身あしどり輕な足取。

まだ方角も確でない。旅馴れた身は野宿の覺悟で、幽に黒ろくもろくもごとごとひくひくやまやましほうしほうを包んだ、灰のやうな渺茫たる荒野をあし足にまかせてたど辿ること二里ばかり。

ゆくて前途に、さらくと鳴るは水の聲。

さてながれ扱は流がある。里もやがて近からう。

雖然、けれども野路に行暮れて、前に流れの音を聞くほど、うら寂し

いものは無い。一つは村里に近いたと思ふまゝに、里心が

ついで、急に人懐かしさに堪へないのと、一つは、水のために
前途を絶たれて、渡るに橋のない憂慮はしさとである。

但し仔細のない小川であつた。焼杭を倒したやうな、黒焦
の丸木橋も渡してある。

唯、其の橋の向う際に、浅い岸の流に臨んで、束ね髪の襟許
白く、褙端折りした蹴出しの薄ら蒼いのが、朦朧として其處
に俯向いて菜を洗ふ、と見た。其の菜が大根の葉とは違ふ。

葡萄色に藍がかつて、づるくと蔓に成つて、葉は蓮の葉に
肖如で、古沼に化けもしさうな大な蓴菜の形である。

はて、何の菜だ、と思ひながら、聲を掛けようとして、一つ咳
をすると、此は始めて心着いたらしく、菜を洗ふ其の婦が顔を

上げた。夕間暮なる眉の影、鬢の毛も纏れたが、目鼻立ちも判明した、容色のいゝのを一目見ると、呀、と其處へ飛脚が尻餅を搗いたも道理こそ。一昨年亡くなつた女房であつた。

「あら、丁さん。」

と婦も吃驚。——亭主の亭と云ふのではない。飛脚の名は丁隸である。

「まあ、お前さん、何うして此處へ、飛んだ事ぢやありませんかねえ。」

人間界ではないものを……と、唯た今、亭主に死なれたやうな聲をして、優しい女房は涙ぐむ。思ひがけない、可憐しさに胸も迫つたらう。

ていこれにつぐるにゆゑをもつてす。
 丁告之以故。——却説、一體此處は何處だ、と

聞くと、冥土、と答へて、私は亡き後、閻魔王の足輕、牛頭

鬼のために娶られて、今は其の妻と成つた、と告げた。

飛脚は向う見ずに、少々妬けて、

「畜生め、そして變なものを洗ふと思つた。汝、そりや間

男の鬼の腹巻ぢやねえかい。」

婦は、ぽつと臉を染めながら、

「馬鹿なことをお言ひでない。丁さん、こんなお前さん、ペらノ

ゝした……」

「乾くと虎の皮に代る奴よ。」

「可い加減なことをお言ひなさいな。此はね、嬰兒の胞胎ですよ

。「と云つた。

とたび 十度、これを洗ひたるものは、生れし兒 清秀にして貴し。

あら 洗ふこと二三度なるものは、尋常 中位の人、まるきり洗濯

をしないのは、昏愚、穢濁にして、然も淫亂だ、と教へたの

である。

「内職に洗ふんですわ。」

「所帯の苦勞まで饒舌りやがる、畜生め。」

とづかくと橋を渡り掛ける。

「あゝ、不可い、其處を。」と手を舉げて留める間もなく、足

許に、パツと火が燃えて、わツと飛び移つた途端に、丸木橋

はぢゆうと水に落ちて、黄色な煙が——濛と湧立つ。

「何が、不可え。何だ内職の葉ツ葉ぐれえ。」

女房は、飛脚を留めつゝ、驚く發奮に、白い腕に掛けた胞

胎を一條流したのであつた。

「否、まあ、流した方は、お氣の毒な娑婆で一人流産をしませ

うけれど、そんな事よりお前さん、橋を渡らない前だと、まだ何

うにか、仕様も分別もありましたらうけれど、氣短に飛越し

て了つてさ。」

「べらぼうめ、飛越したぐらゐの、ちよろ川だ、また飛返るに

仔細はあるめえ。」と、いきつて見返すと、こはいかに、忽ち渺

々たる大河と成つて、幾千里なるや果を見ず。

飛脚は、ハツと目が眩んで、女房に縋着いた。

強ひても拒まず、極り悪げに、

「放して下さい、見られると悪いから。」

「助けてくれ。」

「まあ、私何うしたら可いでせう。……」

と色つぽく氣を揉んで、

「とに角、家へおいでなさいまし。」

「助けてくれ。」

川の可恐しさに氣落がして、殆ど腰の立たない男を、女房

が手を曳いて、遠くもない、槐に似た樹の森々と立つた、青

煉瓦で、藁葺屋根の、妙な住居へ伴つた。

飛脚が草鞋を脱ぐうちに、女房は褌をおろした。

まだ夕飯の前である。

部屋へ灯を点ける途端に、入口の扉をコトくと軽く叩くも

のがある。

白い頬へ口を寄せつゝ、極低聲で、

「誰だい、誰だい。」

「内の人よ。」

「呀、鬼か。」

と怨めしきうに、女房の顔をじろり。で、慌てて寢臺の下

へ潜込む。

布で隠して、

「はい、唯今。」

とびらあ
扉を開ける、とスーと入つた。とゞろくと踏鳴らしもしない、
かるくつおと
軽い靴の音も、其の筈で、ほかりと帽子を脱ぐやうに角の生えた
めんと
面を取つて、一寸壁の釘へ掛けた、顔を見ると、何と！ 色
ろ ほそおもて
白な細面で、髪を分けたハイカラな好男子。

「いや、何うも、今日は閻王の役所に檢べものが立込んで、
ひどよわ
甚く弱つたよ。」

と腹も空いたか、げつそりとした風采。ひよろりとして飛
くあたままへ
脚の頭の前にある椅子にぐたりと腰を掛けた、が、細い身體を
ぶるくと振つた。

「人臭いぞ、變だ。甚く匂ふ、フン、ハン。」
かぎまは
と嗅して、

「これは生々とした匂ひだ。眞個人臭い。」

前刻から、手を挙げたり、下げたり、胸に波を打たして居た女
房。爰に於て其の隠し終すべきにあらざるを知つて、衝と膝
を置いて、前夫の飛脚の手を取つて曳出すとともに、夫の足
許に跪いて、哀求す。曰く、

「後生でござんす。」——と仔細を語る。

曳出された飛脚は、人間が恚うして、こんな場合に擡げ
と些しも異らぬ面を擡げて、ト牛頭と顔を見合はせた。

(家内が。)(家内が。)と雙方同音に云つたが、毎々お
世話に、と云ふべき處を、同時に兩方でのみ込みの一寸
黙然。

「其そのの時ときのよ、己おれの顔かほも見たみからうが、牛頭ごぶの顔かほも、そりや見みせ
たかつた。」

と、蘇よみがへ生とつて年としを經へてから、丁飛脚ていひきやくが、内證ないしようで、兄きやう
弟だいいぶん分はなに話はなしたと傳つたへられる。

時ときに其その時とき、牛頭ごぶは慇懃いんぎんに更あらためて挨拶あいさつした。

「貴方あなた、お手てをお舉あげ下ください。家内かないとは一ひと方かたならぬ。」と云いひ

かけて厭いやな顔かほもしないが、婦をんなと兩りやう方ほうを見較みくらべながら、

「御懇意ごこんいの間あひだと云いひ、それにてす。貴方あなたは私わたしのためには恩人おんじんで

おいでなさる。——お前まへもお聞ききよ、私わたしが毎日まいにち出勤しゆつきんするあ

の破堂やぶれだうの中なかで、顔かほは汗あせだらけ、砂埃すなぼこり、其そのの上うへ蜘蛛くもの巢すで、目め

口くちも開あかない、可恐ひどく弱よわつた處ところを、此このお方かただ、袖そでで綺麗きれいにして

くだ
下すつた。……お救ひ申さないでおかるゝものか。」

か
買はれた女
をんな

「ふるさと
故郷を離れまして、みなさん
皆様にお別れ申してから、ちやうど三
んねん
年でございます。わたしそ
私
は其の間に、それはく……」

ふしめ
と俯目に成つて、うち
家の活計のために身を賣つて、ひとかひ
人と買に連れ
られて國を出たまゝ、ゆくへ
行方の知れなかつた娘が、ふと夢のやうに
かへ
歸つて来て、死したるものよみがへごと
の蘇つた如く、彼の女を取巻いた人
々、に、やつ
窶れた姿で弱々と語つた。支那に人身賣買の公に
おこな
行はれた時の事である。

「……申しやうもござんせん、淺ましい、恥かしい、苦しい、そして不思議な目に逢ひましたのでございます。

國境を出ましてからは、私には東西も分りません。長い道中を、あの人買に連れて行かれましたのでございます。そして其の人買の手から離れましたのは、此の邊からは、遠いか、形も見えませんが、高い山の裾にある、田舎のお醫師の家でございました。

一晩、其のお醫師の離座敷のやうな處に泊められますと、翌朝、咽喉へも通りません朝御飯が濟みました。間もなくでございましたの。

田舎の事で、別に此と云ふ垣根もありません。裏の田圃を、山

の裾すそから、藜あかざつゑの杖つを支ついて、畝路あぜみちづたひに、私わたしが心こゝろ細ほそい空そら
 の雲くもを見みて居をります、離座はなれざしき敷きへ、のそくと入はひつて來きました、
 髯ひげの白しろい、赤あから顔がほの、脊せの高たかい、茶色ちやいろの被布ひふを着きて、頭巾づきんを被かぶ
 った、お爺ぢいさんがあつたのでございます。私わたしは檀那だんな寺でらの和尚をしやう
 の、それも隱居いんきよしたのかと思おもひました。
 其その和尚をしやうが、私わたしの目めの前まへへ腰こしを屈かゞめて、支ついた藜あかざを頤あご杖づゑに
 して、白しろい髯ひげを泳およがせ泳およがせ、口くちも利きかないで、身からだ體だちう中ちゆうをじろ
 くと覗のぞきこ込こむではござんせんか。

可いやあ厭あなねえ。

私わたしは一いつ層そう、藥研やげんで生いき肝ぎもをおろされようとも、お醫師いしやの居ある母お
 屋もやの方はうに逃にげ込こまうかと思おもひました。其その和尚をしやうの可いや厭あらしさに。

ところ
處が不可ないのでございます。お察し下さいまし。……

わたしに
私が逃げようと起ちます裾を、ドンと杖の尖で壓へました。熊
までから
手で搦みましたやうな甚い力で、はつと倒れる處を、ぐい、と手
とと
を取つて引くのです。

あれ、摺抜けようと身を蹴きます時、扉を開けて、醫師が顔を
出しました。何をじたばたする、其のお仙人と汝は行くのだ、
と睨付けて申すのです。そして、殿様の前のやうに、お醫師
は、べたくと唯叩頭をしました。

すぐに連れられて參つたんです。生肝を藥研でおろされる方
がまだしもと思ひました、其の仙人人に連れられて——何處へ行
くのかと存じますと、田圃道を、私を前に立たせて、仙人人が

後あとから。…：情なさけなさなきに歩ある行き惱なやみますと、時とき々々、背うしろ後あかぎから藜

の杖つゑで、腰こしを突つくのでござごいますもの。

麓ふもとへ出でますと、段々だん／＼山やまの中なかへ追おひこ込みました。何どうされるので

ござごいませう。——意こゝろ甚はなは疑だ懼き。然しか業れども已す賣で與に無く

もすもべきすななし
如ごと何ごと——

と本ほん章しやうに書かいてある、字じは硬かたいが、もやの柔はらにあはれである。

「…：目めを確しつりつかつつぶ。杖つゑに搦つかまれ。言ことを背そむくと生いのち命めいがないぞ。

やがて、人ひと里さとを離はなれました山やま懐ふところで、仙せん人にんが立たち直なほつて

申まをしました。

然さうした身みにも、生いのち命めいの惜をしさに、言いはれた通とほりに目めをふきまさし

た後あとは、裾すそが渦うづのやうに足あしに煽あふつて搦からみつきますのと、兩りやう方ほう

の耳みみが風かぜに當あたつて、飄々へうくと鳴なりましたのばかりを覺おぼえて居をります。

可よし、と言いはれて、目めを開あけますと、地ちの底そこの穴あなの裡うちではなかつたのです。すつくり手てを立たてたやうな高たかい峰みねの、其その上うへにもうひとつ塔たふを築つきました臺だいの上うへに居をりました。部屋へやも欄らん干かんも玉たまかとおもひ晃々きらくと輝かきました、怪あやしいお星ほし様さまの中なかへ投なげ込まれたのかとおも思おもひましたの。仙せん人にんは見みえません。其處そこへ二十人にじふにん餘あまり、年とし紀し思おもひましたの。こそ十五六じゅうごから三十さんじゅうぐらゐまで、いろくちがに違ちがひましたが、皆みな揃そろつて美うつくしい、です、悄乎しをくとした女をんなたちが出て來きましてね、いづれ、同おなじやうなお身みの上うへでおいでなさいませう。お可か哀はい相さうでございますわね、と皆みなさんで優やさしく云いつて下くださるのです。

わたし、わたしころ
 私は、私は殺されるんでございませうか、と泣きながら申しま

すとね、年上の方が、否、お仙人のお伽をしますばかりです、

それは仕方がござんせん。でも、こゝには、金銀如山、綾

ようら 羅、錦繡、嘉肴、珍菓、あり餘つて、尚ほ、足りないもの

は、お使者の鬼が手を敲くと整へるんです、それに不足はありません。

せん。毎日の事は勿體ない、殿様に擬ふほどなのです。其

の代り――

其の代り、と聞いただけで身がふるへたではありませんか。――

――え、其の代り。……何、其だつて、と其の年紀上の方が又、

たゞ毎月一度づつ、些と痛い苦しい思をするだけなんですツて

さあ、あの、其その、思おもひをしますのを、殺ころされるやうに思おもつて、
 待まちました。……欄らん干かんに胸むねを壓おさへて、故郷ふるさとの空そらとも分わかぬ、
 遙はるかな山やまの頂たゞが細ほい煙けむりを噴はくのを見みれば、あれが身みを焚やく炎ほかとおも
 思おもひ、石いしの柱はしらに背せを凭もたれて、利鎌とがまの月つきを見みる時は、それも身みを斬き
 る刃やいばかと思おもつたんです。

お前まへさん、召めしますよ。

えゝ！ さあ、其その時ときが参まゐりました。一ひと月つきの中うちに身からだ體だがき
 いに成なりました、其その翌あくる日ひの事ことだつたんです、お仙せん人にんは杖つゑを
 支ついて、幾いく壇だんも壇だんを下おりて、館やかたを少すこし離はなれました、攀よぢ上のほるほ
 どな巖いはの上うへへ連つれて行いきました。眞ま晝つ間の事ことなんです。

天狗てんぐの俎まないたといひますやうな 大木たいぼくの切きつたのが据すゑ置おいてある

んです。其の上へ、私は内外の衣を褌られて、そして寝かされました。仙人が、あの廣い袖の中から、眞紅な、粘々した、艶のある、蛇の鱗のやうな編方した、一條の紐を出して絲ほどにも、身の動きませんほど、手足を其の大木に確乎結へて、綿の丸けた球を、口の中へ捻込みましたので、聲も出なくなりました。

其處へ、キラ／＼する金の針を持つて、一睨み睨まれました。時に、もう氣を失つたのでございます。

自分に返りました時、兩臂と、乳の下と、手首の脈と 方々／＼に血が浸んで、其處へ眞白な藥の粉が振掛けてあるのが分かりました。

翬あくるつき 月、二度目の時に、それでも氣絶きぜつはしませんでございま

した。そして、仙人せんじんの持もちましたのは針はりではありません、金きんの

管くだで、脈みやくへ刺さして、其その管くだから生血いきちを吸すはれるつて事ことを覺おぼえたの

です。一ひととき時ときばかり、其その間あひだの苦痛くつうと云いつてはありませ

が、薬くすりをつけれられますと、疵きずあとは、すぐつぎに次ひの日かに痲おせて落

ちて、蟲むしに刺さされたほどのあとのこも残りません。

え、そんな思おもひをして、雲くもも雨あめも、みんな、目めの下したに遠とほく見

えます、蒼あをぞら空たかのみね高たかい峰みねの館やかたの中なかに、晝ひるは伽とぎをして暮くらしました。

ついで此この頃ころでございます。思おもひもかけず、屋根やねも柱はしらも揺ゆれるや

うな白しろい風かぜが矢やを射いるやうに吹ふきつけますと、光ひかり輝かく蒼あをぞら空たかに、

眞ま黒くろな雲くもが一ひとつかみ掴つかみ、鷺わしが落おちますやうな、峰みね一いっ杯ぱいの翼つばさを開ひら

いて、山を包んで、館の屋根に渦いてかゝりますと、晝間の寢床

——仙人は夜はいつでも一睡もしないのです、夜分は塔の上

に上つて、月に跪き、星を拜んで、人の知らない行をします——

其の晝の寢床から當番の女を一人、小脇に抱へたまゝ、廣室に

駈込んで來たのですが、皆來い！ と呼立てます。聲も震へ、身

も慄いて、私たち二十人餘りを慌しく呼寄せて、あの、二重三

重に、白い膚に取圍ませて、衣類衣服の花の中に、肉身の

屏風させて、一すくみに成りました。

此が禁厭に成るのと見えます。窓を透して手のやうに擴がり

ます、其の黒雲が、じりくと來ては、引返し、じりくと

來ては、引返し、仙人の背は波打つやうに、進退するのが

見みえました。が、やがて、凄すさましい音おとがしますと、雲くもの中に、龍りゅうの形かたちが顯あらはれたんです。柱はしらのやうに立たつたと思おもふと、ちやうど箕みの形かたちが顯あらはれたんです。爪つめが電でんのやうな掌てのひらを開ひらいて、女をんなたちの髪かみの上うへにおほきに見みえました、爪つめが電でんのやうな掌てのひらを開ひらいて、女をんなたちの髪かみの上うへへ仙せん人の足あしを釣つりあげた、と見みますと、天てん井じが、ぱつと飛とび散ちつて、あとにはたゞ黒くろ雲くもの中なかに、風かぜの荒あれれくる狂くるふのばかりを覺おぼえて、まるで現うつつに成なつたんです。

村むらの人ひとに介かい抱はうされると、知しらない國くにの、路みち傍ばたに倒たふれて居ゐました。

其そこ處こで訊たづねまして、はじめて、故ふる郷さとは然さまで遠とほくない、四し五ご十里じふりだと云いふのが分わかつて、それから、釵かんざしを賣うり、帶おびを賣うつて、草くさ樹きをしるべに、漸やつと日ひをかさねて歸かへつたのでございませぬ。

あはれ、此この婦をんなは、そして久ひさしからずして果敢はかなく成なつたと傳つたへられる。

狐きつね

傳つたへ聞きく、近ちか頃ごろ、天てん津しんの色いろ男をとこに何なに生がしと云いふもの、二ふ日つかばかり邸やしきを明あけた新しん情い人ろの許もとから、午ご後ご二に時じ半はん頃ごろ茫ぼうとして歸かへつて來きた。

「しかし奥おくも美び人じんだよ。あの烈はげしく妬やくと云いふものが、恐おそらく己おれを深ふかく思おもへばこそだからな。賣ばい色しよくの輩はいと違ちがふ、慾よく得とくづくや洒落しやれに其その胸むな倉ぐらを取とれるわけのものではないのだ。うふふ。貴あ

方なたはな、とそれ、赫かつと成なる。あの臉まぶたの紅なと云いふものが、恰あた是か、醉よ
 へる芙蓉ふようの如ごとしき。自慢じまんぢやないが、外ぐわい國こくにも類たぐひあるまい。
 新婚しんこん當時たうじの含羞はにかんだ色いろ合あひを新あたしく拜見はいけんなどもお安やすくない奴やつ。
 たゞし嬌けう嗔しん火ひに似にたりと云いふのを思おもつたばかりでも、此方こつちも耳みみ
 が熱ほてるわけさ。―

と六月ろくぐわつの日ひの照てらす中なかに、寢不足ねぶそくの蒼白あをしろい顔かほを、蒸返むしかへ
 しにうだらして、筋すぢもとろけさうに、ふらくくと邸やしきに近ちかづく。

唯ト、夫人ふじんの居室あまに當あたる、甘あまくして艶つやつぽく、色いろの濃こい、唐からの桐きり
 の花はなの咲さいた窓まどの下したに、一ひとり人り影かげ暖たかくイいんだ、少年せうねんの書生しよせいの
 姿すがたがある。其その人ひと、形けい容よう、都とにして麗れいなり、と書かいてある。若わ
 旦那かだんなには氣きの毒どくながら、書かいてあるので仕方しかたがない。

これが植込を遙かに透し、門の外からあからさまに見えた、と見る間もなく、件の美少年の姿は、大な蝶の影を日南に残して、翩然と——二階ではないが——窓の高い室へ入った。再び説く。其處が婦人の居室なのである。

若旦那は、くわつと逆上せた頭を、我を忘れて、うつかり帽子の上から搔りながら、拔足に成つて、庭傳ひに、密と其の窓の下に忍び寄る。内では、媚めいた聲がする。

「よく來てねえ、丁ど待つて居た處なんですよ、心が通じたんだわね。」

と、舌つたるさも沙汰の限りな、それが婦人の聲である。

若旦那勃然として怒るまいか。あと退りに跳返つた、中

かどぐち
戸口から、眞暗まつくらに成なつて躍をどり込んだが、部屋へやの扉との外そとに震ふるへ
る釘くぎの如ごとくに突立つ立たつて、拳こぶしを握にぎりながら、

「りんよ、りんよ、權平ごんぺい、權平ごんぺいよ、りんよ、權平ごんぺい。刀かたなを寄
越こせ、刀かたなを寄越よこせ、刀かたなを。」と喚よびかけたが、權平ごんぺいも、りんも、
寂ひっそり然おとして音おとも立たてない。誰たれが敢あへて此處こゝへ切きれ
ものを持出もちだすものか。

若旦那わかだんな、地ぢたゝらを踏ふみながら、

「汝これ、汝これ、部屋へやの中なかに居ゐるのは誰たれだ、誰たれが居ゐるんだ、汝これ。」
と怒鳴どなつた。裡うちに敵てきありと見みて、直すぐに猪いのししの如ごとく飛込とびこまないので、
が、しかし色いろ男をとこの身しん上しやうであると思おもへ。

婦人ふじんの驚駭きやうがいは蓋けだし察さつするに餘あまりある。卓たくを隔へだてて差向さしむかひ
にでも逢あふ事ことか、椅子いすを並ならべて、肩かたを合あはせて居ゐるのであるから、

こりつしてこゑするあたはず。唯腕で推し、手で拂つて、美少年を、藏

すよりも先づ、離さうとあせり悶えて、殆ど虚空を掴む形。

美少年が、何と飛退きもしよう事か。片手で、尚ほつよく、

しかと婦人の手を取つたまゝ、その上、腰で椅子を摺寄せて、正

面をしやんと切つて、曰く此時、神色自若たりき、

としてあるのは、英雄が事變に處して、然るよりも、尚更ら驚

歎に價値する。

逃げようと思へば、いま飛込んだ、窓もあるのに――

「然うだ。一思ひに短銃だ。」

と扉の外でひき呼吸に呟く聲、彈丸の如く飛んで行く音。

たちまておひじし、忽ち手負猪の襲ふやうな、殺氣立つた蹙音が犇々と扉に寄

る。あまつさそドア
 剩へ其の扉には、観世緞の鎖もさゝず、一壓しに押せば開
 くものを、其の時まで美少年は件の自若たる態度を續けた。
 然も、若旦那が短銃を持つて引返したのを知ると、莞爾
 として微笑んで、一層また、婦人の肩を片手に抱いた。
 其の間の婦人の心痛と恐怖はそも、身をしばる汗は血と成
 つて、紅の雫が垂々と落ちたと云ふ。窘も又極つて、殆ど狂
 亂して悲鳴を上げた。

「あれ、強盗が、私を、私を。」

「何が盗人です、私は情人ぢやありませんかね。」

と高らかに美少年が言つた。

「何だ。強盗だ、情人だ。」と云ひさま、ドンと開けて、衝と

はひ入つて、屹と其の短銃を差向けて、一目見るや、あ、と叫んで、

若旦那は思はず退つた。

怪事、婦人の肩に手を掛けて連理の椅子を並べたのは、美少年のそれにあらず。

此がために昨夜も家を開けて、今しがた喃喃々として別れて來

た、若旦那自身の新情婦の美女で、婦人と其處に兩々紅

白を咲分けて居たのである。

此の美女、姓は胡で、名はお好ちやんと云ふ。

一體、此の若旦那は、邸の河下三里ばかりの處に、流に

臨んだ別業があるのを、元來色好める男子、婦人の張氏

美而妬なりと云ふので、浮氣をする隠場處にして、其の別

美而妬なりと云ふので、浮氣をする隠場處にして、其の別

業へ、さま／＼の女を引込むのを術としたが、當春、天
 氣麗かに、桃の花のとりりと咲亂れた、暖い柳の中を、川上
 へ細い杖で散策した時、上流の方より柳の如く、流に靡い
 て、楚々として且つもの思はしげに、唯一人渚を辿り來た此の美
 女に逢つて、遠慮なく色目づかひをして、目迎へ且つ見送つて、
 何うだと云ふ例の本領を發揮したのがはじまりである。
 流 水豈心なからんや。言を交すと、祕さず名を言つた。お好
 ちやんの語る處によれば、若後家だ、と云ふ。若旦那思ふ壺。
 で、親族の男どもが、挑む、颯る、威丈高に成つて袖褻を
 ひく、其の遺瀨なさに、くよくよ浮世を柳隠れに、水の流れ
 を見るのだ、と云ふ。あはれも、そゞろ身にしみて、春の夕の言

の契ちぎりは、朧おぼろ月づき夜よの色いろと成なつて、然しかも桃もも色いろの流ながれに銀しろの棹ねささして、

お好かうちやんが、自じぶん分ぶんで小こ船ぶねを操あやつつて、月つきのみどりの葉はがくれに、

若わか旦那だんなの別べつ業げふへ通かよつて來くる、蓋けだしハイカラなものである。

以いらい來らい、百ひやく家かの書しよを讀よんで、哲てつ學がくを修しうする、と稱とへて、別べつげ

業ふに居あつ續づけして、窓まどを閉とぢて、垣かきを開ひらいた。

其そのお好かうちやんであつたのである。……

細さい君くんの張ちやう氏しより、然しかも、五いつつばかり年とし少わかき一いち少せう女ぢよ、淡た

装ん素さう服そくして婀娜あだたるものであつた。

時ときに、若わか旦那だんなをみ、露つゆに漆うるししたる如ごとき、ぱつちりとした瞳ひとみ

を返かへして、額ひた髪ひがみはらくと色いろを籠こめつゝ、流なが眊しめに莞につ爾こりした。

が、椅い子すを並ならべた張ちやう婦ふ人じんの肩かたに掛かけた手ては、なよくとしつゝ

も敢て離さうとはしなかつた。

言ふまでもなく婦人の目にも、齊しく女に成つたので、驚

駭を變へて又蒼く成つた。

若旦那も、呆れて立つこと半時ばかり。聲も一言もまだ

出ない内に、霞の色づく如くにして、少女は忽ち美少年に變

つたのである。

變れば現在、夫の見る前。婦人は身震ひして飛退かうとする

のであつたが、軽く撓柔に背にかかつた手が、千曳の岩の如く、

千筋の絲に似て、袖も襟も動かばこそ。おめくとして、恥かし

い、罪ある人形とされて居る。

知是妖怪所爲。

「退け、射殺すぞ。」

詰寄る。若旦那の手を、美少年の方から迎へるやうに、じつと握る、と其の手の尖から雪と成つて、再び白衣の美女と變つた。

「忘れたの、一寸……」

で、迂らした白い手を、若旦那の胸にあてて、腕で壓すやうにして、涼い目で熟と見る。其の媚と云つたらない。妖艶無比で、猶且つ婦人の背を抱いて居る。

と知りつゝ、魂から前へ溶けて、ふらくくと成つた若旦那の身體は、他愛なく、ぐたりと椅子に落ちたのであつた。于二女之間恍惚夢如。

「ほゝゝ、色男や、貴女に馴染んでから丁ど半年に成りま
すわね。御新造に馴染んでからも半年よ。貴方が私の許へ來て
居るうちは、何時でも此方へ來て居たの。あら、あんな顔をして
さ。一寸色男。私と逢つて居るうちは、其の時間だけでも御新
造は要らないものでせう。要らないものなら、其間は何うさ
れたつて差支へないぢやありませんか。
ねえ、若旦那、私は貴方は嫌なの。でも嫌だと云つたつて、
嫌はれた事は分らないお方でせう。貴方は自分の思つた女は、皆
云ふ事を肯くんだと思つて居るもの。思はれるものの恥辱です。
だから、思はれた通りに成つて——其のかはり貴方に差上げた
ものを、御新造から頂戴しました。可かありませんか。

最もう此これだけで澤たく山さんなんです。」

言いふと、齊ひとしく、俄がぜん然ぜんとして又また美び少せう年ねんと成なつて、婦ふ人じんの打うちせ

背むく頬ほに手てを當あてた。が、すらりと身みを抜ぬいて、椅い子すに立たつた。

若わか旦だん那な、氣き疲つかれ、魂こん倦つかれ、茫ぼうとして手てもつけれられず。美びせう

少ねん年ねんの抜ぬけたあとを、夫ふう婦ふ相あ對ひたいして目めを見み合あはせて、いづれも

羞しゆう恥ちに堪たへず差さ俯ふう向むく。

頭あたまの上うへに、はたくと掌てを叩たたいて、呵から々くと高たか笑わらひするのを、

驚おどろいて見みれば、少せう年ねん子し、擧き手よしゆ高かう揖いふして日いはく、吾われ去さ矣らん。

「御ご機き嫌げんよう、失しつ禮れい。」

と、變へんじて狐きつと成なつて、白はく晝ちゆうを窓まどから蝙蝠かうもりの如ごとくに消きえぬ。

此これは教けう訓くんではない、事じ實じつであると、本ほん文ぶんに添そ書へがきがあるの

である。

大正三年三月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「みつ柏《がしは》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みつ柏

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>